

## 第1章 序論

### 1-1. はじめに

近年、公共の住宅も民間のマンションも、極めて閉鎖的にできている。隣近所との付き合いも少なくなり、町内会・自治会活動も不活発という、人間関係の希薄化が否めない地域社会の現状がある。しかし、その一方で、ひと時代昔にあった井戸端会議のような、暮らしの中に自然とあったコミュニティが、最近になってカタチを変えて蘇ったように思う。それは、自らの生活環境やライフスタイルに応じて、使いやすいソーシャルメディアの機能を活かし、コミュニティを再構築しているからだと考えられる。

そのような社会を背景に生じた、「住み開き」と名付けられた「自分の自宅をパブリックに開放している場や活動」に共同性を得ることができる可能性のかけらが散りばめられていることに気付いた。「場」がなくても、ネット上でコミュニティが成立する時代、今求められている「場」の姿とはどのようなものなのか模索する。

### 1-2. 研究目的

本研究では、自宅を集いの場としてパブリックに開放する活動が、どのようにして生成し、そこにどのような場が生まれているのか、そこにどのような関係が生まれているのかなどを調査し、「場の獲得」に寄与するアーキテクチャの作り方を模索することを目的とする。また、現地調査でその場の微妙な表情や人々の心の動きを体感し、写真や図面として記録し、集まった状況を解析することによって、「活動の集積が全体の状況を構成する」行動や空間が台頭していることを、全体像としても実感できることにつなげていきたいと考えた。もし、その実態、意義を明らかにできれば、まちづくり事業などに新しい視点を提供できるばかりでなく、都市生活者が都市の見方や楽しみ方を知り、都市生活を楽しむためのリテラシーを身につけることの手助けができるのではないかと期待する。

### 1-3. 研究の位置づけ

コミュニティ形成の場に関する既往研究では、先駆的な取り組み事例の空間・運営・利用者行動、地域との協働の実態や特質が比較的詳細に分析されたり、社会的な居場所としての質などが多く論じられている。しかし本研究では、住居人以外にも利用されている住宅に限定し、空間と人々の活動を合わせて捉え、活動や場所の意義を分析した点で独自性がある。

## 第2章 概要

### 2-1. 住み開きの定義

住み開きの発案者であるアサダワタル氏は以下のように住み開きを位置づけている。

#### ■住み開き

「自宅や個人事務所を代表としたプライベートな空間の一部に、本来の用途以外の新しいアイデアを盛り込み、様々な人が集えるパブリックな空間へと変えてゆくその活動、もしくはスペースを指す。」

### 2-2. 住み開きの誕生の背景

#### 2-2-1. 家族・住居・住まい方の変化

人間関係の希薄化が問題となる中、非血縁同士のルームシェアをはじめとする多様な集合が形成され、コミュニティを求める住まいが増えつつある。そしてかつては、住まいから仕事、集会、教育、医療などを社会的施設として分離させていったのであるが、SOHO やオープンコモンによって仕事場や集まりの場所の住宅回帰現象が顕著になってきた。生活の土台としての住居から、住居に異物を介入させて、何かを生み出すという創造の土台とする住居が増えてきたことが、住み開き誕生の理由の1つであると考えられる。

#### 2-2-2. ソーシャルメディアによる生活の変化

日常生活におけるソーシャルメディアは世代や空間を超えた新しいコミュニティを再構築している。こうした新しいコミュニティによる自発的かつ自立的な活動が広がっている現状がある。Twitterのようなマイクロブログによって自分から情報を発信できるようになり、自己表現の場が圧倒的に増えた。ウェブ上だけでなく、自分たちの活動を場を持つことで表現する、「作品」としての場が住み開きである。

## 第3章 研究

### 3-1. 研究対象

大阪と東京を対象に、文献またはウェブサイトでの「住み開き」、「居場所」などのキーワードをもとに検索を行った。定義にあてはまり、その中で、以下の3項目を選定条件とした。

- ① 行政によるものではなく、住民が主体となって運営していること。
- ② 固定した住居であること。
- ③ 住人以外とのイベントのプログラムがあること。

大阪と東京に限定したのは、非血縁同士のルームシェアをはじめとして多様な集合が形成され、多様な住まいの形態があると考えたためである。また、人・モノ・資金・情報・機能が集中していることも理由の1つである。

### 3-2. 研究方法

研究方法としては、大都市圏を対象にアンケート調査を行い、住み開きの全体的な傾向を把握する。この中からそれぞれ性格が異なると考えられる事例を選定し、文献調査や、ヒアリング調査、現地調査によって、住み開きの活動や場の意義を様々な角度から考える。

### 3-3. 全体的な傾向

全体的な傾向を把握するため、住所の特定できた30事例の運営者を対象にアンケート調査を実施し、16件から回答を得ることができた。(回収率53.3%)

#### 3-3-1. 設立について

##### 1) 開設時期

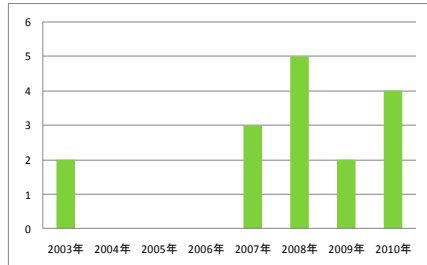


図1 開設時期

図1を見ると、2008年と回答した割合が最も高く、次に2010年という回答が続き、ここ2、3年に開設した事例が多いことがわかる。近年になって情報発信の時代が到来し、また情報発信は自己発信の時代でもあるため、このような住み開きが増えてきたのではないだろうか。自分たちの活動の場があることにより、何をやっているか伝えやすく、場所を持っていること自体が表現となってくる。

##### 2) 設立主体・運営主体

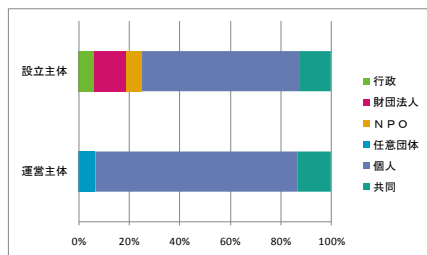


図2 設立主体・運営主体

図2を見ると、設立主体、運営主体共に個人の割合がそれぞれ高い割合を占める。情報技術の拡大と共に、個人単位の活動もまた広がりつつある。設立主体に行政や財団法人の事例が見られるのは、もともと運営者にやりたいことがあって、行政や財団法人に相談し、活動を始めたためと考えられる。

#### 3-3-2. 運営方法について

##### 1) 運営日

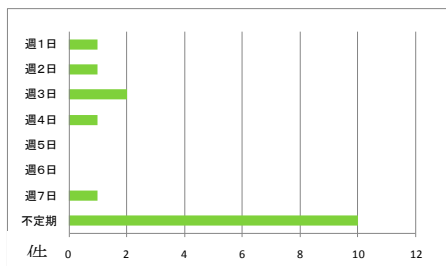


図3 運営日

図3を見ると、「不定期」という回答が62%を占めており、また「週5日以上活動をしている」という回答は6%にも満たず、運営者の好きな時に活動していることが伺える。活動を行うことが義務ではないので、運営者が無理なく行える範囲で活動していると考えられる。逆にいえば、自分が何かやりたいと思った時に単発的なイベントが、何時でも好きな時にやりやすいことを表している。

##### 2) 活動内容

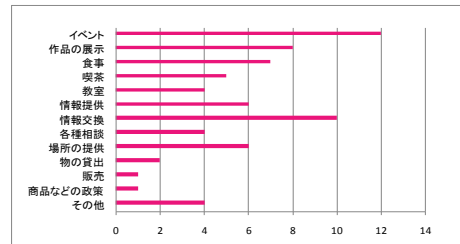


図4 活動内容

図4を見ると、「イベント」はすべての活動内容の中で最も多い回答を得た。イベントは小規模なものから大規模なものがあり、また、種類にも幅がある。その時々々の住まいの状況に合わせて、自宅で行いやすい。「食」や「本」など誰もが関わりやすいテーマを設けてイベントを行っていることが多い。また「情報交換」という回答も多く、情報を交換する場としても機能していることがわかった。

#### 3-3-3. 来訪者について

##### 1) 来訪者の属性・運営者との関係

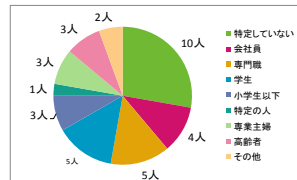


図5 来訪者の属性

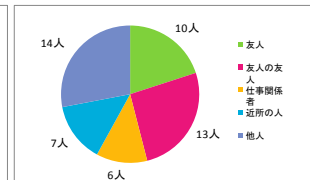


図6 運営者との関係

図5、図6を見ると、属性では「特定できない」が高い割合を占め、運営者と来訪者の関係について見てみると、「友人」、「友人の友人」を「他人」が上回り、属性、運営者と知り合いであることに関係なく、行事に参加していることが伺える。ネットによって誰もが情報を得ることができ、誰でも自分が興味をもったイベントに参加できるようになったためと考えられる。

#### 3-3-4. 空間について

##### 1) 建物形態

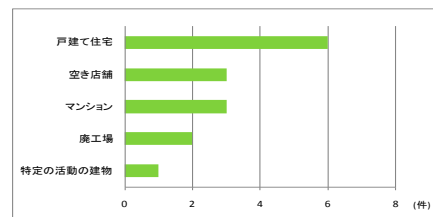


図7 建物形態

「戸建て住宅」という回答が多い。娘が家を出ていくなどの家族や仕事の変容に合わせて、空いた部屋を巧みに生かしている。続いて「空き店舗」や「廃工場」「特定の活動の建物」などのかつて別の用途で使われた建物という回答も多かった。従来の住宅という概念を気にせず、ストックに対して、広くて安いというメリットを魅力に感じる人が多い。

### 3-4. 事例調査による分析

#### 3-4-1. 生成プロセスとの関係からみた場の役割

運営者のやりたいこと、目的によって住み開きの場の生成プロセスは異なり、多岐にわたる。本項では、それにより場の性格や役割にどのような影響を与えているのか分析する。

運営者の活動を始めた動機に着目すると、昔からあったものを変化させた「更新型」と今の時代だからできた「新生型」の2つが場の生成の方法として抽出できる。

##### 1) 革新型

「葉月ホールハウス」は、運営者の両親が作曲家だったため、小さい頃実家で著名な人を集めて演奏会を定期的に行っていた。その影響があって運営者自身も音楽に興味を持ち、かつて実家で行われた活動をよみがえらせている。演奏会の他にも、展覧会や絵画展など様々な主催企画なども行い、過去にあった場を再現しているのではなく、今の時代に合わせて形を変えて復活させている。

また、「ぶんぶん文庫」は、図書館としての機能を持った住居である。子どもたちが読みたい時に、子どもたちが行ける範囲に本のある場所をつくりたいと思い、活動を開始した。公共の図書館であると、規範が多く、思うように行動できないが、ここでは特にルールなどは設けず、子どもたちの自由にさせている。そのため、声に出して読み合ったり、楽器などで演奏をしたりと様々な活動が見られる。また、子育て中の母親たちにとっては、悩みなどを相談する場所にもなっている。

更新型の住み開きには、以上のように2つの特徴が見られる。1つ目は、かつてあった場や活動を今の時代に合わせて生まれ変わらせていること。2つ目は従来なら公共空間で「官」が負ってきた役割を「民」が担っていることである。



図8 葉月ホールハウス



図9 ぶんぶん文庫

##### 2) 新生型

「LwP asakusa」は、生き甲斐となる仕事をしていきいきと楽しく生活をする人がもっと世の中に増えればきっと街は素敵になるという想いで活動してい

る。その想いを発信していくにあたり、面白い仕事、新しい働き方、街づくり、コミュニティ、食などのテーマで様々な活動している人を呼び、トークイベントや交流会といった「ライフワークプロジェクトを紹介すること・造ること・つなげること」を目的としたイベントを行っている。このように、自分たちの活動を「場」を使って発信している。情報は目に見えないため、場所があると何をやっているかがわかりやすいという特徴がある。

また、「まれびとハウス」は、単に家賃折半のシェアハウスではなく、資金調達をして、事業収入を生み出す、そのプロセスが周囲への大きな刺激になるような家を目指して活動を始めた。共有リビングで週2、3回のイベントが行われ、それらの告知は主にTwitterで行っている。経済的な面だけでなく、普段の交友関係を越えた人達と集い、テーマを設けて議論することに価値を見出している。

新生型の住み開きには、以上のように、2つの特徴が見られる。1つ目は、場を媒体にした自己発信をしていること。2つ目は、シェアハウスを創造を生み出す装置として機能させていることである。



図10 LwP asakusa



図11 まれびとハウス

#### 3-4-2. 運営者の来訪者に対する関わり方

本項では、運営者の来訪者に対する関わり方が場の雰囲気や来訪者同士の交流にどのような影響を与えているのか分析する。他人同士の交流を促し、自ら来訪者に積極的に話しかける「積極的関与」と、来訪者の居方に干渉せず、積極的には話しかけない「受け身的関与」の2つが関わり方として抽出できる。

##### 1) 積極的関与

「あかねこうぼう」は地域の工房として自宅を開放し、運営者が長年取り組んできた「織」を教えている。教室が終わると、住居と兼用のキッチンが、コーヒーなどを飲みながら交流するサロンとして機能する。運営者による「織」の魅力や、珍しい糸の話などは、織物を習った来訪者の体験を深める。また、運営者は月に1回運営委員会の会議を行い、ワークショップを企画する。単発で参加できるワークショップは講師と生徒という一対一の関係だけでなく、他の来訪者と共に考えて創造するという密な交流を促すことができる。

また、「ハウスマッカリ」では、トークイベントやマッカリパーティーと称する食事会などが行われている。運営者はアーティスト・イン児童館という活動をしているため、アート関連や教育関係など、様々な分野の人が出入りし、既にコミュニティができて

いるが、運営者の母親的な明るいキャラクターで来訪者同士をつなぐ。普段触れないコミュニティに、来訪者は異空間に放り出された気分になる。そういう時に、運営者の手助けがあると来訪者は、ここにいることを許された気持ちになり、安心する。運営者が「マッカリはみんなの家」と言っているように誰でも迎え入れてくれるような安心感を運営者が造りだしている。



図 12 あかねこうぼう



図 13 ハウスマッカリ

## 2) 受け身の関与

「まれびとハウス」では、来訪者の持ち込み企画を自由に任せて、運営の目的等も来訪者が決めれば良いというスタンスである。運営者はそっと見守り、聞き役になることで、来訪者の居方を限定せず、心地の良い自由な空間を造りだしている。

### 3-4-3. 場の特性

本項では、住み開きに見られる空間を分類し、場の特性の傾向を比較する。居住空間と住み開き空間に着目すると、居住空間と住み開き空間が一緒になっている「同居型」、居住空間と住み開き空間が完全に分かれている「別居型」、居住空間と住み開き空間と一緒にいるところと、分かれているところの両方を兼ね備えている「共居型」の3つが抽出できる。

#### 1) 同居型

「ハウスマッカリ」は、普段リビングで使っている場所をイベント時に住み開き空間として利用している。また「八広 HIGHTI」のようなシェアハウスでは、共有リビングが住み開き空間として使われている。場所は変わらないが、時間によって場のモードを変換している。

#### 2) 別居型

「こすみ図書」は、元店舗だった土間の空間を改装してつくった図書空間が住み開き空間で、その奥に住居がある。普段の生活でも住み開き空間は住居としての利用はない。よって場のモード変換をしていない。

#### 3) 共居型

「あかねこうぼう」は、教室は織り機の置いてある住み開き空間であるが、教室が終わった後のサロンは、住居のキッチンダイニングである。活動によって臨機応変に場のモードが変換されている。

## 第4章 まとめ

「住み開き」という装置を使って、プライベートな空間と普段関わることのないコミュニティとの接触を容易にさせ、日常から特別な準備なく非日常を

つくりだしている。住み開きは、パブリックなスペースを住宅に入れることで、あえて不自由でありながらも自由な状態をつくっている。そうすることで、パブリックスペースを無視できない心理が人間に働き、これを起点に、自分の生き方や公共とはなにかということを考えるようになる可能性がある。

運営者は住み開きの場でもごく当たり前のように振る舞っており、肩の力の抜けた楽しみ方を心得ている。運営者の自由に振る舞っている姿によって来訪者がワクワクして引き込まれていく状態が生まれている。住宅という概念にとらわれずに、運営者が自ら課した決まり事には忠実であるからこそ、私的な行為でも、正の影響を及ぼしていると考えられる。それぞれの姿が、創造的な行為であり、このような創造的な行為が積み重なれば、場は力を持ち始める。

来訪者は住み開きの活動を通じて価値観の違う様々な人と交流し、別の世界への視野を獲得する。人それぞれの見方で場所を読み取り、自分の居場所として変換している。その間を行ったり来たりすることで相互に刺激をもたらし、自分の生き方、公共について再考することに、それぞれの創造的な行為を広げていく可能性がある。

## 第5章 結論

「住み開き」の場を実際に体感して、公共空間は寄与のものではなく、それを必要とする人々が主体的に空間を読み替え、造っていくという流れが始まっていることが感じられた。これからの公共空間は、ソフトとハードのどちらかだけでは限界がある。両者のバランスが大切であり、場所だけでも、人だけでもその「一つの場」として成り立たない。ハードとソフトの間とでも呼べるような自由を規制することや使い方を決めるだけではない、使いこなされ、改変されることを前提としたアーキテクチャを設計し、計画された場が、地域の中にあれば、公共的に機能すると考えられる。

より流動的になった社会の状況の中で、都市生活を楽しむためのリテラシーとして「住み開き」のようなその時代に合った方法論を思考していくことが求められている。

### 【参考文献】

- 1) LANDSCAPE EXPLORER : マゾヒスティック・ランドスケープ, 学芸出版社, 2006年
- 2) 篠原聡子, 大橋寿美子, 小泉雅生, ライフスタイル研究会: 変わる家族とかわる住まい, 彰国社, 2002年
- 3) 山本理顕, 中村拓志, 藤村龍至, 長谷川豪: 地域社会圏モデル, INAX出版, 2010年
- 4) 飯田詠子: 都市におけるコミュニティ形成の場に関する研究 コミュニティカフェの運営形態を通して, 東京理科大学大学院修士論文, 2008年